

# EU キャンパス躍進!

EUキャンパス支援室長 和田 喜彦  
国際連携推進機構事務部長 田中 竜哉

## I. 2019年度同志社大学・チュービンゲン大学共催 第3回国際シンポジウム開催さる! 『ダイバーシティ』を尊重する社会構築への挑戦 Challenges toward Building Societies Filled with Respect for “Diversity”

### はじめに

同志社大学チュービンゲン EU キャンパス（以下「EU キャンパス」という）がドイツの名門校チュービンゲン大学内に設置されたことを記念する第3回目の国際シンポジウムが、2020年2月25日（火）～27日（木）の3日間、本学の京田辺校地と今出川校地で開催されました。参加者は延べ約140人でした。



オープニングセレモニーで挨拶する松岡学長。



オープニングセレモニーで挨拶する  
チュービンゲン大学アモス副学長。



第1日目、京田辺・言館礼拝堂にて。

『『ダイバーシティ』を尊重する社会構築への挑戦』をメインテーマとし、以下のサブテーマ別にパネル・セッションを設けました。身体的・精神的特性の多様性、生物多様性、性の多様性、宗教や民族の多様性、そして、思想や表現の多様性という視点から本学とチュービンゲン大学の研究者や大学院生が英語で激論を交わしました。

## シンポジウムの開催主旨について

「倮儻不羈」に象徴されるように、同志社の創立者・新島襄は、学生の個性の「多様性（ダイバーシティ）」を尊重するように努めました。「ダイバーシティ尊重教育」の先駆けといえる同志社からは、日本の社会福祉の父と呼ばれ、もっとも良心的な同志社人とされる救世軍・山室軍平など、社会福祉のパイオニアたちを多数輩出しました。ヘレン・ケラーが来日し、同志社女子部で講演を行ったことも有名な話であり、日本で最初に視覚障がい者に大学進学のための門戸を開いたのも同志社でした。新島襄の「一人ハ大切ナリ」を礎とした本学の教育は「ダイバーシティ」を尊重する歴史そのものといっても過言ではありません。

しかし、現在、国際社会では「ダイバーシティ」を認めようとしないう風潮が強まっています。そのような社会雰囲気の中で、生きづらさを感じているのは、障がい者、民族的・人種的マイノリティ、性的マイノリティ、女性などです。日本でも、異質な意見や立場に対する寛容性が失われてきています。差別、憎悪、分断や対立を煽るヘイトスピーチを発する者が後を絶たない状況です。

ドイツ社会では、第二次世界大戦中、人種的・民族的・性的・宗教的・政治的マイノリティ、および障がい者らが弾圧・排斥された歴史を持っています。しかし、戦後は戦時中のナチス時代に「人間の尊厳」を侵害した失敗を繰り返すまいとして、過激な極右の台頭を抑制し、難民を積極的に受け入れるようになってきました。ところが昨今では、移民・難民が急増することへの懸念も表明されています。

自然生態系についても類似の危機に面しています。生息域の破壊、人間による乱獲、外来種の侵入などの要因によって、絶滅する生物種は加速度的に増えています。海洋プラスチックなどの廃棄物は、野生生物を死に追いやっています。「生命の尊厳」が尊重される抜本的改革がもためられていると言えます。

本シンポジウムでは、「ダイバーシティ」を尊重する社会の課題及びあるべき姿について、日本やドイツ、アジア、欧州等の文脈で、自然科学、人文科学、社会科学の最先端の学術的研究成果を共有し、幅広く議論を行い、科学や大学が問題解決にどう貢献できるのかを展望しました。

## 各パネルのテーマ・座長・登壇者と概要について

各パネルのテーマと座長、登壇者は以下の通りです。

### 〔Panel 1-1〕 身体的・精神的多様性と「人間の尊厳」

座長：櫻井芳雄教授

（同志社大学脳科学研究科、神経科学、心理学）

- (1) 小泉範子教授（同志社大学生命医科学部、再生医科学）
- (2) マリウス・ウェッフィンク教授  
（チュービンゲン大学医学部、眼科学）
- (3) ハンス＝ウルリッヒ・シュニッツラー教授  
（チュービンゲン大学理学部、生体音響学）
- (4) 飛龍志津子教授（同志社大学生命医科学部、生物音響工学）
- (5) 石川信一教授（同志社大学心理学部、臨床心理学）



〔Panel 1-1〕 京田辺・言館礼拝堂

オープニングセレモニーに続き、「身体的・精神的多様性と“人間の尊厳”」をテーマに、自然科学分野における最先端の研究と視点から、ヒトを含む生物が持つ多様性について議論しました。話題は、ヒト角膜の再生医療、遺伝子変異による多様性と進化、コウモリの反響定位システムと工学的応用、児童思春期のメンタルヘルスの問題など多岐にわたり、医学、生物学、工学、心理学などの実験科学が多様性をどのようにとらえ、現代社会における問題解決にどのように貢献できるかについて、会場からの活発な質問もあり、理解を深めることができました。（櫻井芳雄座長）

## 〔Panel 1-2〕 生物多様性の保全と自然の価値

座長：鄭躍軍教授

(同志社大学文化情報学部、国際連携推進機構長、行動計量学、環境意識)

- (1) トマス・ポットハスト教授  
(チュービンゲン大学理学部 / 国際科学倫理研究センター、倫理学、生命科学の理論と歴史)
- (2) 小原克博教授 (同志社大学神学部、宗教倫理)
- (3) 大園享司教授 (同志社大学理工学部、森林生態学)
- (4) 長谷川元洋教授 (同志社大学理工学部、土壌生態学)



〔Panel 1-2〕 今出川・良心館 305 教室

パネル 1-2 では、生物多様性と自然の価値をキーワードとして議論が行われました。国内外の 4 名の登壇者は、それぞれ、倫理的・認識論的視点から見た生物多様性と文化多様性、人間と動物の関係の歴史的展望、真菌類のグローバルな多様性と土壌中の生物多様性をめぐって、ダイバシティの形態と意味づけに関する最新の研究成果を報告されました。後に、フロアの参加者も加わり、熱い学際的議論が交わされました。一連の意見交換を通じて、生物多様性に関する課題はまだまだ多く残されていること、生物多様性の重要性に対する一般の人びとの認識を高めることの重要性、政策立案に寄与しうる研究を実施することの重要性などについての共通認識が得られました。(鄭躍軍座長)

## 〔Panel 2-1〕 多様な人種・宗教背景を持つ人々の尊重と共存

座長：マーサ・メンセンディーク准教授

(同志社大学社会学部、社会福祉学)

- (1) モニカ・シュリンプ教授  
(チュービンゲン大学人文科学部日本学科、日本学、宗教学)
- (2) カリン・アモス教授  
(チュービンゲン大学教育担当副学長、経済社会科学学部、教育研究所、教育学)
- (3) イヤス・サリム・アブ=ハジャイール助教  
(同志社大学高等研究教育院、イスラム市民社会)



〔Panel 2-1〕 今出川・良心館 305 教室

「多様な人種・宗教背景を持つ人々の尊重と共存」をテーマとした当パネルは、日本の歴史における宗教間の交流、ドイツにおける多文化教育、そして日本における外国人労働者政策といったアプローチから社会における多様性と共存を考える貴重な機会となりました。それぞれの専門領域は異なるものの、「二元論的」な狭い考え方は閉鎖性や不寛容、そして対立といった結果につながるということが共通して確認されました。また、多様性の中にも共通性を見つけることが受容につながり、共存するには人間の尊厳を守ることから始まる、といった認識が共有されました。このような多様性への理解を育てるための教育のあり方について貴重な示唆と刺激とを与えられました。(マーサ・メンセンディーク座長)

## 〔Panel 2-2〕 性の多様性と課題

座長：佐伯順子教授（同志社大学社会学部長、メディア学）

- (1) 秋林こずえ教授  
（同志社大学グローバル・スタディーズ研究科、ジェンダー研究、平和研究）
- (2) イングリッド・ホッツ＝デイヴィス教授  
（テュービンゲン大学人文科学部、英文学ジェンダースタディーズ学科長、英文学、ジェンダースタディーズ）
- (3) ジル・スティール教授  
（同志社大学国際教育インスティテュート、政治学）



〔Panel 2-2〕 今出川・良心館 305 教室

パネル2-2では、沖縄の女性運動や性暴力の社会的実態、アフリカ系アメリカ人作家・ジェームス・ボードウィン『アナザー・カントリー』に関する社会科学的分析、日本のジェンダーギャップの大きさと女性の幸福感の矛盾という、方法論やフィールドが多岐にわたる発表が一同に会しました。一見かけ離れたテーマでありながら、ジェンダーや居住地、出身地によって抑圧される社会的弱者共通の「スティグマ」「トラウマ」の経験が明らかになり、本来的に学際的、国際的課題であるジェンダー、セクシュアリティの問題について、日独英からの参加により、活発な議論が交わされました。「ジェンダーの主流化」（95年北京女性会議）にも即し、地域が抱える固有の文化的歴史的背景の相違も考慮しつつ、将来の課題解決をも見据えた充実したパネルとなりました。（佐伯順子座長）

## 〔Panel 3〕 思想・表現の自由と他者への配慮

座長：ハンス ペータ・マルチュケ教授

（同志社大学法科大学院司法研究科、EU 法、比較法）

- (1) マルティン・ネットスハイム教授  
（テュービンゲン大学法学部、ドイツ公法、国際私法）
- (2) ヴィクトリア・エッシュバツハ＝サボー教授  
（テュービンゲン大学人文科学部日本学科、東京大学、東京カレッジ、日本学）
- (3) 池田謙一教授（同志社大学社会学部、メディア学）
- (4) 西澤由隆教授（同志社大学法学部、政治学）
- (5) 板垣竜太教授（同志社大学社会学部、社会学）



〔Panel 3〕 今出川・良心館 305 教室

Panel 3 concentrated on “Freedom of Speech/Thought and Consideration for Others”, which is per se a legal topic, but with a wide range of social, political and cultural implications. This became very clear during the five presentations, which highlighted above others the problem of political speech in the internet, where the limits of legal restriction were explained by citing relevant jurisdiction, as well as the importance of awareness of cultural differences in educational programs. The presentation of results of related sociological and political field work gave an additional and very enlightening incentive to understand the complexity of the subject, which was rounded up by a report on a citizens initiative in Kyoto, dealing with racist activities against Korean schools in Japan.（ハンス ペータ・マルチュケ座長）

〔ラウンドテーブル〕 全ての人の「人間の尊厳」が尊重される社会実現のために大学はどのような貢献ができるか？

モデレーター：和田喜彦教授（同志社大学経済学部、EU キャンパス支援室長、エコロジー経済）

- (1) マリウス・ウェッフィンク教授（テュービンゲン大学医学部）※ Panel 1-1
- (2) 小原克博教授（同志社大学神学部）※ Panel 1-2
- (3) カリン・アモス教授（テュービンゲン大学教育担当副学長、経済社会科学学部、教育研究所）※ Panel 2-1
- (4) イングリッド・ホッツ＝デイヴィス教授（テュービンゲン大学人文科学部）※ Panel 2-2
- (5) 西澤由隆教授（同志社大学法学部）※ Panel 3



〔ラウンドテーブル〕 今出川・良心館 305

最後のラウンドテーブルでは、全ての人の「人間の尊厳」が尊重される社会実現のために大学はどのような貢献ができるかがテーマでした。人間の尊厳を守るために社会から差別と偏見を根絶しなければならないことは言うまでもないことですが、そのために大学として、教育プログラム、研究レベル、学生の自主的な活動など、様々なレベルでの貢献が可能であることが確認されました。一方で、大学は真理を知るための基本的作法を教えることに集中すべきだという意見も出ました。つまり自らの頭で考える批判的思考力を身に付けさせることが解決の近道でもあるという考えです。議論の結果、批判的精神を身に付ける「知育」と共感力や倫理観を育む「徳育」の両方が重要であることが認識されました。自ずと同志社の建学の精神の柱の一つである「知（智）徳併行」の実質化の必要性が両大学で共有されたことになりました。（和田喜彦モデレーター）

## サイドイベントについて

シンポジウムの前後には、分野別のグループに分かれて研究室訪問が実施されました。両校地で合計6つの研究室がテュービンゲン大学の研究者を歓迎しディスカッションが行われました。共同研究に結びつきそうな具体的な提案もあったと聞いています。

テュービンゲン大学から、男女共同参画推進の責任者3人の教員が来られており、同志社大学の男女共同参画推進室長である阪田真己子教授と会う機会も持たれました。テュービンゲン大学は大学全体の責任者だけではなく、学科毎に男女共同参画推進委員がいることが紹介され、同志社との違いに驚かされました。

3日目の昼休みには、今出川校地から徒歩2分の距離にある「バザールカフェ」にもテュービンゲン大学関係者が訪問しました。バザールカフェは留学生や移民、そして精神的な重荷を負う人などをサポートする NGO ですが、同志社の教職員や学生たちが

多数ボランティアとして参加しています。チュービンゲン大学の訪問団は、理事長と店長の説明に熱心に耳を傾けていました。

同じく3日目の午後には、茶道部の協力を得て、茶道を体験していただきました。茶道部の学生さんたちがわかりやすい英語とドイツ語で、作法とその意味を説明してくれました。学生たちが国際文化交流と異文化理解におおいに貢献してくれました。今後のEUキャンパスでの、学生を主体とした相互交流も現実のものとなりそうです。

今回の国際シンポジウムは、新型コロナウイルスの懸念がある中で開催されました。消毒用アルコールの使用を入室時、食事、コーヒブレイクの前に参加者全員に行ってもらうなど、感染予防対策を徹底的に実践しました。大規模な食事会、レセプションはキャンセルとなりましたので、非公式の交流の場が限られてしまったことが残念ではありました。

様々な困難もありましたが、シンポジウムそのものでは、議論が活発に交わされ、大きな成果をあげることができたのも、関係各位の献身的な御尽力の賜物であります。この場をお借りして謝意を申し上げます。



全てのセッション終了後、良心館にて。



チュービンゲン大学訪問団と松岡学長、植木副学長、横川副学長らとの懇談。

## II. 両大学にとっての真の国際主義とは ——「愛人主義」に裏付けられた「国際主義」——

### チュービンゲン大学の訪問団来日を後押しした「愛人主義」の精神

そもそも、チュービンゲン大学訪問団が実際に来日できたのは、以下のような経緯によります。訪日団の一人、医学部教授で眼科医のウェッフィング教授が感染症対策を担う政府系機関のロベルト・コッホ研究所の友人にコンタクトを取り、医学的にみて日本は安全であるという情報を得ました。さらにドイツ外務省も日本をリスク国に挙げていないことを確認しました。エングラー学長は、ウェッフィング教授からの客観的な情報を入手されたと同時に、本学の感染予防対策の方針を評価していただき、躊躇なく「訪問団を同志社に派遣すべし！」という決断をくださったのです。

以下に述べるような「愛人主義」が両大学の間で共有されていなければ、危険を冒してまで来日してくださらなかったかもしれません。本シンポジウムの開催が、紙一重のタイミングであったとはいえ、実施に持ち込めた最大の要因は、「愛人主義」に裏付けされた「国際主義」の精神が両大学の間で共有されていたからだ強く感じております。

### 新島襄が唱えた「愛人主義」とは

新島襄は、国際主義という言葉は使用しませんでした。外国を敵視する偏狭な「愛国主義」の対極として「愛人主義」を唱えました（『新島襄宗教教育論集』290～299頁）。本学の「国際主義」が他大学と決定的に異なるのは、そして他の大学には真似できない点は、「愛人主義」に裏付けられた「国際主義」という点でありましょう（『新島襄365』165頁）。

愛人、すなわち、人を愛することに裏付けられた国際主義とは具体的にはどのようなことなのでしょう。価値観や、伝統、文化、習慣が異なる海外の人の立場に立って考え、他者の価値観や習慣を理解するように努めることが基本ではないかと考えます。つまり自分の価値観や伝統を絶対化したり、それを押し付けたりすることではなく、お互いの違いを理解し、相手をおもんばかり、妥協点を探っていくことではないかと思えます。

「愛人主義」に裏付けられた「国際主義」は既に両大学で共有されているとは言え、その真の価値は、EU キャンパスの具現化のプロセスにおいて試されていると言えます。EU キャンパスの活動や運営についての意思決定をしていくなかで、ドイツと日本のやり方が異なることに気づくことが多々あります。意思決定のプロセスやスピード感も異なります。互いの違いを理解し、チュービンゲン大学の意思決定のプロセスを尊重しつつ、同志社のやり方をチュービンゲン側に理解いただきつつ、物事を進めていく必要があると日々実感させられています。このことこそが、「愛人主義」の具現化であると思えます。

EU キャンパスは他大学には絶対に真似できない国際主義、グローバル化の象徴です。それは愛人主義に裏付けられた国際主義によってのみ実現できるという意味に加え、もうひとつの意味があります。それは、同志社大学とチュービンゲン大学の間には、以下に述べるような長い歴史によって培われた強い信頼関係が存在するということです。

### チュービンゲン大学との30年に渡る信頼関係

同志社大学とチュービンゲン大学との公的な交流は、1990年6月に締結された学術交流に関する覚書によって始まります。翌年1991年より学生の交換が開始されました。

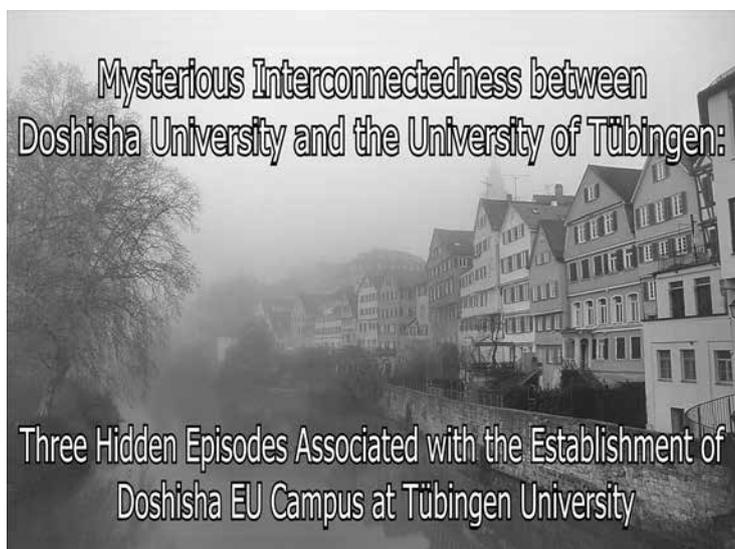
その後、同志社大学の中に「チュービンゲン大学同志社日本語センター」が1993年に設置されました。チュービンゲン大学人文科学部日本学科の2年生約25人が、約1年間京都に滞在し、日本語や日本文化を学ぶというプログラムの拠点です。このセンター20周年の2013年には、名称を「チュービンゲン大学同志社日本研究センター」と改名して現在に至ります。このプログラムに参加した修了生は、約720人となり、駐日ドイツ大使など日本とドイツの架け橋として活躍する人物を多数輩出しております。

その他、研究者同士の交流も続いています。2007年9月、2009年3月、2009年11月には人文・社会科学の研究者による Joint Workshop が開催されました。また、2015年から朝鮮半島問題をテーマに、チュービンゲン大学、同志社大学、高麗大学の研究者が一堂に会し、3大学の頭文字2つを冠した「TUDOKU」共同研究プロジェクトが実施されました。

以上のようにチュービンゲン大学と本学の間には30年間にわたる交流によって培われた強い信頼関係が存在します。

その上で、最後にもう一点、両大学の間には、時空を超えた不思議な縁が存在することを指摘しておきたいと思えます。

### III. 同志社大学とチュービンゲン大学の不思議な縁 —— 同志社 EU キャンパス誕生に関連する3つの秘話 ——



*Mysterious Interconnectedness between  
Doshisha University and the University of Tübingen:  
Three Hidden Episodes Associated with the Establishment of  
Doshisha EU Campus at Tübingen University*

EU キャンパスの活動が開始され、両大学間の交流が活発化する中で、同志社大学とチュービンゲン大学との関係には時空を超えた不思議な縁が存在したということが徐々に分かって参りました。不思議な縁を物語るエピソードがこれまでに少なくとも3つ判明しています。不思議な縁が、EU キャンパス設立を陰で後押ししてくれたのかもしれませんが。

霧に包まれたチュービンゲン市内、ネッカー川河畔。

#### 1. ヘルマン・ヘッセと新島襄 Hermann Hesse and Jo Neesima

一つ目は、同志社創立者新島襄とヘルマン・ヘッセの出会いです。新島は、第二回目の欧州訪問で1884年8月5日、イタリアからスイスに入国しました。翌日サン・ゴタール峠を登坂中、心臓発作のため倒れ遺書を書きました。倒れてから2日後、体調が少し快復した後、新島は峠を下り、鉄道と船を乗り継いでスイス中部に位置するルツェルンに向かいました。



サン・ゴタール峠



サン・ゴタール峠の、新島襄が遺書を書いたと思われるホテル。



新島が泊った当時のホテル名は、Hotel du Mont Prosa、現在の名称は、ALBERGO SAN GOTTARDO である。

しばらくルツェルンで静養し、登山列車でリギ・クウムまで旅をできるまでに健康を取り戻した新島は、スイス北部の街、バーゼルに向かいました。キリスト教の宣教団体であるバーゼル伝道会の「ミッション・ハウス」館長のヨハネス・ヘッセ宣教師を訪ねるためでした。彼は、ヘルマン・ヘッセの父親です。新島は8月22日から1週間ほど「ミッション・ハウス」に滞在しました。ヨハネス・ヘッセ宣教師は当時7歳だった息子をはるばる東洋から来た新島に会わせました。ヘッセにとって初めて出会った日本人が新島襄でした。新島はヘッセに強烈な印象を与えたようです。ヘッセは、自らの両親は新島をととても可愛がったと、後に感慨深く語ったそうです。

ヘッセは、青年期、チュービンゲン大学近くの「ヘッケンハウアー書店」の見習い店員としての生活を送り、その後ドイツを代表する作家になりました（1946年、ノーベル文学賞受賞）。現在、ヘッセが働いた書店の一角はヘッセ記念館になっています。そのヘッセ記念館からさほど遠くないところにチュービンゲン大学の御厚意により、その敷地内にEUキャンパスを設置させていただきました。ヘッセゆかりの書店から徒歩圏内の場所に新島ゆかりのEUキャンパスが、二人の出会いから133年後に誕生したのです。不思議な縁（ミステリアス・コネクテッドネス）を感じます。



1884年8月8日にルツェルン（Luzern）で、新島が宿泊した Hotel the Weissen Kreuz は、現存する。この2週間後にヘルマン・ヘッセと出会うことになる。



リギ山の登山鉄道と、リギ・クウム（Rigi Kulm）からの眺望。

## 2. ハーバード神学校初代校長と新島襄

### The First Principal of Harvard Divinity School and Jo Neesima

二つ目のエピソードは、昨年2月、チュービンゲン大学にてシンポジウムが行われた時に教えられた話です。本学の訪問団が、エングラー学長に対し、新島襄は、1884年の論文（「キリスト教主義高等教育機関設立のために」）の中で、「ドイツがヨーロッパ文明の先頭に立っていることの原因はドイツの大学から発散する力の中に見いだせる」というフィヒテの言葉を引用し、歴史ある著名なドイツの大学を5つ挙げており、その中にチュービンゲン大学を挙げておりました、と伝えました。そうすると、エングラー学長が笑顔をもって次のようにおっしゃいました。「外国の有力大学の学長がチュービンゲン大学を高く評価してくださったのはたいへん嬉しい。実は、新島先生に褒めていただく少し前に、ハーバード大学の初代校長も褒めてくださったのです。ハーバード大学の前身ハーバード神学校が建学後の黎明期、非常に困難な時期があった。初代校長は、教員たちに対し、Just Emulate Tübingen（チュービンゲン大学から学べば大丈夫だ、問題は解決する）と書物に記していたのです。」エングラー学長は、「チュービンゲン大学が同志社とハーバードの両大学の初代学長から褒めていただいたことはとても光栄だ」とおっしゃっていました。

同志社大学の新島はチュービンゲン大学を目指すべき大学のひとつと挙げていたのですが、ハーバード大学もチュービンゲン大学を模範としていたことを知り、3つの大学の不思議な繋がりを感じます。

## 3. スピノザと同志社 EU キャンパス

### Spinoza and Doshisha EU Campus at Tübingen University

#### *With Face of Eternity, Everything is Relative.*

(永遠の価値の前では他の価値は相対的に低くかすんで見える)

この言葉は、チュービンゲン大学のエングラー学長が昨年2月のシンポジウム後のレセプションで、本学からの訪問団に対して紹介された17世紀オランダの哲学者スピノザの言葉です。「その心は、」とエングラー学長は続けました。「同志社大学は、26年間にわたり、学内に『チュービンゲン大学同志社日本研究センター』を置いてくださり、その運営への支援を惜しみませんでした。『誠実さ』という『永遠の価値』を同志社は提供してくれたのです。それゆえ両大学の関係を極めて大切に思っています。京都の大学と関係を築くのならば他にも優秀な大学があるじゃないかという学内の意見に対して、上のスピノザの言葉で反論しています」とおっしゃいました。17世紀に生きたスピノザが、エングラー学長を通して、時空を超えて現代に生きる私たちに語りかけ、EUキャンパスの誕生をアシストしてくれたと思っています。

### おわりに

同志社大学とチュービンゲン大学との3つの不思議なエピソードを紹介させていただきました。今後、第4、第5番目の不思議なエピソードが誕生することを祈念しつつ筆を置きたいと思います。

(わだ・よしひこ)

(たなか・たつや)



新島襄がドイツで撮影したポートレート写真  
(1872年ベルリン市内の写真館にて)



EU キャンパスに掲げられる予定の新島襄の肖像画と筆者。

\*本稿では、ドイツ語名称 (Philosophische Fakultät) を、「人文科学部」と訳し使用しております。